

巻頭言

総合情報基盤センターの教育支援に期待する

理事(教育担当)・副学長 山西 潤一

情報化社会の進展がすすみ、インターネットの利用者は 9000 万人に及び、人口普及率にして 7 割近くになってきた。社会を生きる力としての情報活用能力がもはや不可欠の時代である。小学校から高等学校の初等・中等教育での情報活用能力の育成に向けた情報教育も進んできている。学校教育の教員も、インターネットやパソコン等の情報通信技術、いわゆる ICT の活用能力の指導のみならず、児童生徒の学力の向上に向け、ICT を適切に利活用してよく分かる授業を展開することが求められている。今年になって、文部科学省から示された新しい学習指導要領案には、従来以上に ICT の適切な利活用が明示された。さて、学校教育でこのような情報教育を受けてきた学生たちを対象とした、大学での情報処理教育や情報教育の在り方も、当然従前ものとは変わるべきであろう。大学生の PC 所持率も上がり、もはや半数以上の学生が 1 年次に自分の PC を所有しているというデータもある。学生時代にリテラシーとしての情報活用能力はもとより、問題解決能力や創造性を育む様々な学習場面、授業登録や単位の確認、休講など教務情報の処理も含めた学生生活での日常的活用を促したい。今やどのような職場に行っても、インターネットや PC を活用しない職場は限りなく少ない。様々な仕事をする道具である。道具は毎日活用してこそ、その良さや活用の工夫、危うさ、問題点等に気づくものだ。そこで、当然のことながら、大学では学生の活用する学習情報環境を整備すべきである。いつでもどこでも活用できるキャンパスのユビキタス化だ。コンピュータ室に PC を並べただけの部屋はもはや時代遅れ。学生が教材リソースにいつでもアクセスでき、自由に創造性を働かせながら学習できる情報創造空間、国内外の大学や研究機関といつでも交流できる協働学習空間等々、欧米の大学や国内の大学でも、このような学習情報空間の構築が進められている。富山大学でも総合情報基盤センターを中心に学習環境の新たな構築を望みたい。

さて、教育の問題に話を戻そう。富山大学の中期目標・計画には e-Learning の活用による教育改善の記述が多い。もともとコンピュータの教育利用は個に対する学習の支援というねらいから始まった。理解力や学習のペースはひとり一人異なるのが当たり前。それぞれの学習のペースに合わせた課題やチュートリアルを持つ個別学習システムとして開発されたのがコンピュータ支援学習である。学習履歴管理システムとしての LMS の機能も格段に向上してきた。基礎学力の低下が叫ばれる今日、一定の基礎知識や技術など、この個別学習システムの導入でかなりの学力向上が図れるものも少なくない。また、近年では、英語等の外国語コミュニケーション能力を習得する学習システムにも優れたものが多い。これらの個別学習システムのメリットは、学生が能力に応じ、いつでも好きなだけ学習できる点である。学習結果としての到達度評価も明確である。諸外国の大学では、全授業の 1/3 程度が e-Learning になってきている大学もある。e-Learning には、多様な形態が存在する。通常の授業をビデオで撮って、授業で配付した資料と共に、ネット上で講義を配信し、何度でも繰り返し学習を可とするもの。通常の授業を補完する課題や資料をネット上におき、学生たちに事前や事後の学習として与えるもの、授業では難しいインタラクティブな議論を可能にするものなど等多様である。勿論、教員と学生の対面授業が基本になることは言うまでもない。学生の能力の多様化が進むなか、教員も教授方法についての工夫改善が求められる時代である。総合情報基盤センターは、学内の安心安全なインターネット環境の保持のみならず、今後は、学習環境整備や教育方法開発など教育支援機関としての役割がますます重要になってくる。期待したい。